

『浅茅が露』の『とはずがたり』への影響

—その共通基盤をめぐって—

大 倉 比 呂 志

はじめに

『とはずがたり』に対する物語文学の影響は多大で、しばしば虚構性の問題と絡めて論じられている。中でも、巻二における後深草院の亀山院に對する小弓の負けわざとして、六条院の女樂が模倣され、それに表象されるように、『源氏物語』の影響が大きく、とりわけ、作者二条の紫上と女三宮への傾斜が指摘されている。^①さらに、『狭衣物語』や『夜の寢覚』といった平安後期物語の影響も指摘され、^②最近では擬古物語の影響も論じられている。^③小稿においてはそれらの先行研究を踏まえながら、『浅茅が露』が『とはずがたり』に及ぼした影響について考察していくことにする。

ところで、『とはずがたり』は二条が十四歳であった文永八年(一二七二)元日から語り始められているのに対して、奇しくも『浅茅が露』は同年に成立した『風葉集』に十首に及ぶ物語中の和歌が採録されているが、

思ひのほかにしはし添ひたる人に別るとてよめる

浅茅が露の聖の母

幾夜かは苔のむしろに寢覚して君を恋しと思ひ明かさん

(巻十八・雑三・一三九六)

の歌だけが現存本にはなく、巻末の散逸部分にあった歌であろうと推定されている。この歌は、唐から帰国した北山の聖が見た夢に源中将(後に書写山の聖)が現れ、その導きによって亡くなった源中将の姫君(母—大納言典侍)が蓮台野にいたのを蘇生させ、聖の母である尼君が姫君を二年余りにわたって世話し、姫君との別れを惜しんで詠んだものと考えられ、^④さらに『風葉集』では、中納言(もとの二位中将)が「入道関白」、姫君が「尚侍」と記されているところから、作者二条が『浅茅が露』を目にした可能性があるとすれば、散逸部分を含むものであったと推定される。

一

『浅茅が露』冒頭において、寵愛の大納言典侍を源中将に盗まれた帝は、「清涼殿に一人たたずませ給ひて、あはれに御覧じめぐらす。降りるなんの御心もあれば、雲の上もそそろにながめられさせ給へば」(一七二)とあ

り、さらには、帝の心中思惟を通して、「久しくこそ（姫宮ノ琴ヲ）うけたまはらね。あはれ、故大納言の典侍のいみじかりし上手を。えこそ（姫宮ハ）それほど弾き伝へ給はざらめなど、□^⑤の折にも、（故大納言典侍ヲ）忘れがたく思さるべし」（二七三）と語られているように、帝は女の〈喪失〉によって退位を考えており、帝にとって大納言典侍は忘れられない存在として扱われている。これは帝のありようとしては特異な状況というべきだろう。^⑥ いわば、『浅茅が露』は〈喪失〉から語られており、このことが作品全体を拘束しているといえよう。^⑦

一方、『とはすがたり』において二条が有明の月との関係を後深草院に告白した後、院の口から、

「人より先に（二条ヲ）見初めて、あまたの年を過ぎぬれば、何事につけてもなほざりならずおほゆれども、何とやらむ、わが心にもかなはぬことのみにて、心の色の見えぬこそいと口惜しけれ。わが新枕は故典侍大（私云―二条の母）にしも習ひたりしかば、とにかくに人知れずおほえしを、いまだ言ふかひなきほどの心地して、よろず世の中つつましくて明け暮れしほどに、冬忠・雅忠などに主づかれて、隙をこそ人悪くうかがひしか。（二条ガ故典侍大ノ）腹の中にありし折も、心もとなく、いつかいつかと、手の内なりしより、さばくりつけてありし」など、昔の古事さへ言ひ知らせたまへば、……（三・三五五）

と語られているように、院にとって「典侍大」は性の指南役であったと同時に、最初の女であったが故に、その後忘れられず、「典侍大」が二条の父雅忠と結婚し、二条が生まれてからはひたすらその成長するのを待って

いたとあるがごとく、院には「典侍大」の存在が極めて大きく、その「典侍大」は雅忠と結婚したわけだから、院にとってそれは女の〈喪失〉を意味したはずである。その結果、「典侍大」の〈ゆかり〉としての二条が四歳の時から院御所に引き取られたのだ。

以上のように、帝と後深草院は大納言典侍という女性を〈喪失〉し、悲嘆にくれていたという点において、共通していることになる。とすれば、作者二条は『とはすがたり』の執筆に際して、大納言典侍の〈喪失〉によって悲嘆にくれている帝のことが語られている『浅茅が露』を念頭に置いたのではないのか。以下、両者の類似していると思われる箇所について述べていくことにする。

二

帝における〈喪失〉のことは前述したわけだが、「世の人、月日の光と思ひきこえた」（二七九）る二位中将（私云―関白の息子で、後の中納言）と右大臣を父とする三位中将はそれぞれのように語られているのだろうか。先ず二位中将は、幼なじみの姫宮（私云―父―帝、母―大納言典侍）に想いをかけるが、帝が退位したために齋宮も交代することになり、先坊の姫宮が予定されていたにもかかわらず、母御息所の急死により、姫宮が急遽齋宮に立つこととなった。二位中将は失意のために、先坊の姫宮に通い出したが、夜離れがちであり、それが原因で病気となった先坊の姫宮を叔父の律師が加持をするものの、邪心を抱き、先坊の姫宮を犯したことが二位中将の知るところとなり、その結果、先坊の姫宮は死去することとなる。とすれば、二位中将は姫君と先坊の姫宮とを〈喪失〉したことになる。

一方、三位中将の母は帥宮の娘だが、『三位中将ガ』五つ、六つのほどにて、御兄人の中将殿（私云―源中将。後の書写山の聖）も行方なくなり給ひし御嘆きにて、若君（私云―三位中将）をも大臣の御もとへ渡しきこえて、御さま変へて、吉野山に籠り給ひけるとばかりうけたまはりし』（二六三）と高野尼君の口を通して語られているように、三位中将の母並びに叔父の中将は行方不明となり、いわば近親者の「喪失」した状況であることが理解される。

このように、帝・二位中将・三位中将のありようを見ていくと、直接的もしくは間接的に男女関係が基となつて、三人が「喪失」を味わっていることになる。

それに対して、二条は後深草院・雪の曙（西園寺実兼）・有明の月（性助法親王）・「大殿」（鷹司兼平）・亀山院という関係のあつた男たちも、巻四の二条の出家以降は、すべて性愛の対象ではなくなったという点で、「喪失」したと考えられるであろう。さらに、二条が院御所から追放されてから出家したこと自体、現世における「喪失」を意味しているわけだが、特に、巻五後半で後深草院が死去し、その写経のために両親の形見の品を手放したということが語られている。二条にとって夫的存在であつた院の死と両親の形見の売却は、いわば近親者の「喪失」を意味し、その後、那智における夢想で手に入れた扇を、「那智の御山の師、備後の律師覚道といふ者」（5・五二三）が仏の加護があると言つたにもかかわらず、巻末で院の娘である遊義門院に贈与したということも、やはり「喪失」を意味しよう。また、その直前に石清水八幡宮で院と再開した折に与えられた三枚の小袖のうちの最後の一枚を那智に布施として差し出す折に、「あまた年馴れし形見のさ夜衣今日を限りと見るぞ悲しき」（5・五二四）という二条の

歌が記されているが、そこに「喪失」の悲哀が詠み込まれているところからすれば、『とはすがたり』は「喪失」で幕を閉じているといえるはずだ。さらに、冒頭は後深草院と父雅忠との二条を院に与えるという密約で語り始められている。そのため、院が二条の実家に来訪する際に、二条は呼び寄せられて、二晩目に院によって犯されるといふ、いわば「処女喪失」^⑥が語られている点からも、冒頭近くと巻末とが「喪失」という状況で首尾照応していることになる。

以上のように、作品中で語られている二条の人生史を辿っていくと、「喪失」と密接に関係していることが理解されよう。とすれば、『とはすがたり』を「喪失」で首尾照応させて語つた作者二条の根底には、『浅茅が露』における「喪失」への思いが内在していたと考えられる。

三

では、作者二条は『浅茅が露』からどのような影響を蒙つたのか。それは先ず二条と姫君の母親がともに大納言典侍であつたという点に着目せねばなるまい。

さらに、二位中将は姫宮に執着していたにもかかわらず、その姫宮が齋宮となつたために、

同じ都のうちにたにあらで、はるけきなかを思ひやり給ふ御心には、
心の闇にまよひける人も羨ましく、「しるべする世人あらじかし、
身を捨てて入りやしなまし鈴鹿山昔を恋ひし跡をたづねて」
などのみ、ながめわび給ふ。（一九五）

とあるように、やり場のない二位中将の悲嘆が語られている。だがその後、兵衛大夫の家に方違えに出かけた二位中将は、思いがけなく美しい娘（私云―源中将と大納言典侍との間にできた姫君）を垣間見て、「まみ、額など、心に離るる時なき斎宮にぞ、ふとおぼえ給」（一九九）い、斎宮の〈形代〉としての姫君に執着し、一夜の契りを結ぶ。翌日、再び姫君のもとを訪れた二位中将は、

標のうちなる御事の、行方も知らずはてもなき思ひに身を焦がすに、

これ（私云―姫君）に心を慰めよと、仏神のつくり出で給ひたるにやなど思ふも、あはれにぞうれしき。（二〇六）

と、斎宮の〈形代〉たる姫君を発見した喜びが語られてはいるものの、姫君と二位中将との関係を知った姫君の乳母の後夫である兵衛大夫によって、二位中将の姫君への接触が妨害されたあげく、乳母の死去を契機として、姫君は兵衛大夫に言い寄られたために、姫君が太秦参籠に出かけた折、前夫式部大夫と乳母との間にできた娘式部や兄の仁和寺禅師の助力で、西の京に失踪した後、二位中将も太秦に姫君を訪ねたものの、再会できなかつたが、偶然にも父右大臣の墓参途中の三位中将に助けられて、姫君は二位中将の子を出産する。しかし、姫君は死去する。その後、二位中将は太秦で高野尼君と東人との会話を聞き、姫君が源中将と大納言典侍の子であることを知り、「斎宮にあさましく似奉り給へりと見しは、ただそれならんかし」（二六六）と納得し、姫君が実は斎宮とは異父姉妹であったことを知るといふ筋書きからすれば、二位中将が斎宮となった姫宮の代わりに姫君に魅せられたのは、その類似性によるのであって、姫宮と姫君とはへゆか

り〉の関係であったということだ。

それに対して、後深草院が四歳の二条を院御所に引き取ったのは、二条が「典侍大」のへゆかり〉であったからだ。そのような意味において、斎宮となった姫宮の代わりにへゆかり〉である姫君に執着した二位中将と院のありようとが類似していると同時に、二条は二歳の時、姫君は三歳の時に、各々母親を〈喪失〉し、二条は母親のへゆかり〉であり、姫君は姫宮のそれであったということだ。

また、姫君は失踪した母のもとで生まれた後、乳母の後夫となった兵衛大夫宅↓太秦↓西の京↓蓮台野↓北山↓三位中将邸↓宮中へと流離する一方、二条も実家から院御所に移居し、院御所から追放されて出家した後は、東国と西国とを転々と流離している点からも、へさすらい〉のイメージが付与されているのであって、ともに両者は同じような境遇のもとで人生を歩むのである。

とすれば、姫君は架空の人物とはいえ、作者二条にとって看過できない人物ではなかったのか。そのような点から考えると、作者二条が自己の人生史を回想し、自画像を造型する際に、姫君との類似性を看取し、それがへさすらい人〉二条を形象化する一端となったのではないのか。

四

さらに付言すれば、二位中将は姫宮が斎宮に立った失意によって、先坊の御息所の娘である姫宮のもとに通い始めたが、夜離れがちが原因で、先坊の姫宮が病気になるので、その病気見舞いのために二位中将が訪れる場面は、次のように語られている。

(先坊ノ姫宮ガ) 立ち給へる方に(律師ガ)いと忍びて入りぬるに、(二位中将ハ)あやしくて、やをら後にたちて入り給ひぬるを、(律師ハ)いかでか知らん。(律師ハ)昨夜の中の戸をやはら開くれば、鎖さざりけるも心ときめきせられて、入りぬるに、宮、今宵はさりとともと(二位中将ガ訪ネテ来ルダロウト)待ち給へるに、更けゆく夜のさまに、例の、漁夫も釣するばかりにて臥し給へるに、律師は出でぬと、(先坊ノ姫宮ガ)思すほどに、思ひのほかにほのめき寄る気色、待つ人(私云―二位中将)にまがふべきかは。(先坊ノ姫宮ハ)憂しと思しめし入りたれど、中将は、さばかりにやと聞き給ひければ、(先坊ノ姫宮トノ仲ハ)憂き世にこそありけれと見はて給ひて、なほたち帰り給ひぬ。

(一八九―一九〇)

この経緯には先坊の姫宮が律師の秘かな来訪を待っていたのではないかと、いう二位中将の誤解があるとしても、傍線部のように、二位中将が二人の関係を知るところとなり、「更けし夜の星の光のあやなさにつきなしてそたち帰りぬる」(一九〇)の歌を先坊の姫宮に贈ったところ、それが原因となつて先坊の姫宮は死去する。

一方、『とはすがたり』においても巻二で後深草院の延命の祈りのために招かれた院の弟の有明の月と二条との関係の開始が語られ、巻三で院御所を訪れた有明の月が二条に向かって口説く個所は、

御前に人もなくて、向ひまゐらせたるに、憂かりし月日の積もりつるよりうち始め、ただ今までのこと、御袖の涙は、よその人目も包みあ

へぬほどなり。何と申すべき言の葉もなければ、ただうち聞き居たるに、ほどなく(院ノ)還御なりけるも知らず、同じさまなるくどきと、御障子のあなたにも聞こえけるにや、(院ガ)しばし立ち止まりたまひけるも、いかでか知らむ。さるほどに、(院ハ)例の人よりは早き御心なれば、さにこそありけれと推したまひけるぞ、あさましきや。

(3・三五二―三五三)

と語られている。これによって、後深草院は二条と有明の月との関係を知るところとなり、その後は院の管理下のもとで二人の関係は続き、二条は有明の月の子を妊娠するものの、やがて有明の月は伝染病のために死去する。

以上のように、『浅茅が露』と『とはすがたり』の当該部分において、状況は異なるものの、女(先坊の姫宮と二条)と近親者(ともに僧)との関係が当人たちの知らない間に、既に女と関わりがあった人物(二位中将と院)に目撃ないし盗聴され、その後、先坊の姫宮と有明の月が死去するという筋書きが類似している。作者二条が有明の月の二条への口説きを院に聞かれた部分を執筆する際に、『浅茅が露』の類似した部分を参考にしたかどうかは定かではないが、それが『とはすがたり』の当該部分と近似している点を考慮しておくべきだろう。

おわりに

架空の作品である『浅茅が露』と二条の実体験がほぼ体験通りに語られている『とはすがたり』とを同一の場で論じられないのは当然のことだが、

今まで述べてきたように、作者二条が『とはすがたり』を執筆しようとした際に、『浅茅が露』で語られている〈喪失〉を基層に据え、二条の人生史において『浅茅が露』で語られた姫君のそれを重ね合わせるようにしたのはいいのか。その原点は二人の母親が大納言典侍であり、ともに母親は彼女たちが幼少の頃、死去したということだ。

さらに、〈ゆかり〉と〈さすらい〉という点で、二条は姫君と類似しているが故に、作者二条は姫君を幻視して、『とはすがたり』の中で自画像を点綴しようとしたのではないのか。

もちろん、作者二条が『浅茅が露』を読んだという明確な証拠があるわけではない。ただ『とはすがたり』において、『源氏物語』をはじめとして、平安後期物語からの影響も考えられ、前述したように、二条と姫君には多くの共通性が存在するという点からも、『浅茅が露』からの影響を考えてみる必要があるのではなからうか。まさにそれは『とはすがたり』が同時代文学と横軸でどのように関わっているのかという問題ともなる。すなわち、それは従来の縦軸式の文学史では把握しきれないものをあぶり出してくる可能性を秘めているのではなからうか。^⑩

注① 清水好子「古典としての源氏物語―とはすがたり執筆の意味―」（『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』 武蔵野書院 昭五四・11）、西沢正史『とはすがたり』における『源氏物語』（『女流日記文学講座』第五卷 勉誠社 平二・9）

② 松本寧至（『中流女流日記文学の研究』 明治書院 昭五八・2）、阿部真弓

（『とはすがたり』に見られる『夜の寝覚』撰取の様相―人物造型を中心に―）
詞林 第十一号 一九九一・4）は『夜の寝覚』の影響を、安田徳子（『とは

すがたり』の虚構―物語撰取を中心として― 名古屋大文学部研究論集 文学33 昭六二・3）は『狭衣物語』の影響を各々指摘している。

③ 辻本裕成「同時代文学の中の『とはすがたり』」 国語国文 平一・1

④ 鷲沢伸介『「あさちが露」小考』（芸文東海 八一九八六・12）

⑤ 安永悦子は、帝と大納言典侍との関係は、桐壺帝と桐壺更衣とのそれに類似していると指摘する（『「あさちが露」の独自性』 平安文学研究 第二十一輯 昭三三・6）

⑥ 神田龍身『物語文学、その解体―『源氏物語』『宇治十帖』以降―』（有精堂 一九九二・9）

⑦ 以下、〈喪失〉に関しては拙稿『「あさちが露」論―喪失尽くし―の物語―』（平安朝文学研究 復刊第七号 平一〇・11）と一部重なる点のあることを御断りしておく。

⑧ 巻四において、二条は石清水八幡宮で後深草院と再会し、一夜を過ごして、形見の小袖が院から与えられたと語られている点から、二人の間に性関係があったとも考えられようが、それは二条にとってかつての性愛の対象とは次元を異にしている。

⑨ 一般的には二条にとつての初めての男は後深草院と解されているが、岩佐美代子（『宮廷女流文学読解考 中世編』 笠間書院 平一一・3）は、雪の曙と考えている。

⑩ 三位中将も父右大臣の墓参途中で、西の京へ失踪後の姫君が出産で苦しんでいる姿を偶然に見て、「類なしと見奉りし伊勢の斎宮に思ひよそへられて、つくづくとまもられ給ふに」（二四六）と語られている。

⑪ 現存本は後半から虫食いが多いが、巻末は「西の対を、さりぬべく取り払ひて、気近き調度などとり渡して、（三位中将八姫君ヲ）待ちきこえ給ふ」（二

八八)と語られている。

⑫ 『風葉集』(巻五・秋下・二九八、巻十二・恋二・八八五)によれば、姫君は「尚侍」と記されており、宮中に居住したと考えられる。なお、『風葉集』は岩波文庫『王朝物語秀歌選』による。

⑬ 拙稿『』とはすがたり』と後期物語』(『古代中世文学論考』 第五集 新典社 平一三・一)においても、『夜の寝覚』と『狭衣物語』の『』とはすがたり』への影響を論じているので、参照されたい。

⑭ 辻本(注③前掲論文)も『』とはすがたり』と同時代の文学状況を論じている。

* * *

本文は、『浅茅が露』が笠間書院刊『中世王朝物語全集Ⅰ』により、『』とはすがたり』が小学館刊新編日本古典文学全集によっているが、算用数字は巻、漢数字は該当部分のページ数を示す。なお、表記を私に一部改めた箇所がある点を御断りしておく。

(おおくら ひろし 大学院日本文学専攻)